

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 尹 亭仁

本論文は韓国語と日本語の受身構文と使役構文について、豊富な実例に基づいて、対照言語学的に研究したものである。2つの言語を扱ってはいるが、分析の中心は韓国語にあり、日本語については、主に、韓国語のヴォイスの特徴を浮き彫りにするために比較対象として用いられている。

本論文は、全体で325ページ、1章から6章までと序章、結章からなり、前半の1~3章では受身構文について分析を行っている。第1章では、韓国語の受身形式を 類から 類までに分類し、それらの受身形式と述語との結合関係とその制約について考察した。特に、語彙的受身動詞と呼ばれている 類の受身形式については、それぞれの形態について、実例の収集・分類を行い、実際の使用頻度、動作主の格表示の様相、ヲ格との共起の有無について詳細に分析している。

第2章では、韓国語の3つの受身形式について、動作主がどのような格表示をとるのか、つまり動作主の格表示に関してその全体的な様相を記述し、それぞれの受身構文の構造的な特徴を明らかにしている。さらにその結果から、韓国語の受身構文が日本語の受身構文と対応しない理由について考察を加えている。第3章では、韓国語と日本語の小説の翻訳を使い、韓国語と日本語の受身形式について、それぞれの形式と動作主の格表示の関係を考察している。

後半の4~6章では使役構文の分析を行っている。第4章では、受身の場合と同じく、韓国語の使役形式を 類から 類までに分類し、述語との結合関係とその制約について考察している。特に、使役動詞と呼ばれている 類の使役形式については、個々の形態の使用頻度や統語的特徴を詳細に述べている。第5章では、韓国語の3つの使役形式について、それらが使われている使役構文と動作主の格表示との関係を分析し、その構文的特徴を明らかにしている。第6章では第3章と同様、韓国語と日本語の小説の翻訳を使って、使役形式と動作主の格表示の関係を分析し、両言語の特徴について論じている。

以上のような構成で考察した結果、本論文で明らかになったのは、次のような点である。

1. 韓国語の受身と使役について、それぞれの構文を作るのに用いられる形式としてどのようなものがあるかを整理し、それぞれについて、形態論的制約、格の共起関係を中心とする構文上の特徴、意味論的特徴を明らかにした。
2. 受身については、I類からIII類まで大きく分けて3つのタイプを設定し、I類は受身形式として用いられる語数は少ないが、構文の種類は多様で、再帰動詞としての用法が多い、などの特徴を持つ。II類は、構文上、大きな制約が存在し、ヲ格目的語と共起しない、また、意思を持つ動作主表示としての二格とは共起しない、という特徴をもつ。III類は、形式によってさらに3つに分けられるが、それぞれについて、動作主

の格表示に制約が見られ、これら3つが相互に補い合うような働きをしている。

3. 使役についてもI類からIII類までの3つのタイプを設定し、それぞれについて、形態論的、構文論的、意味論的特徴を明らかにした。ここでも受身の場合と同様、動作主の格表示に関する制約が見られ、受身の場合とある程度並行していることを示した。
4. 以上のような分析の上に立って、日本語と対照することにより、両者の違いの原因を従来の研究より詳細に特定することができるようになった。

これらのうちで、特に、格表示に関する構文上の制約を詳細に明らかにしたことは本論文の大きな功績であると言える。これは従来あまり指摘されてこなかったものであり、それを豊富な実例によって、それぞれの構文のタイプごとに詳細に示したのは本論文が初めてであると考えられる。また、それによって、これまで断片的に行われてきた韓国語と日本語の構文上の不一致に関する研究についても、それが生じる理由について従来よりも説得力をもって示すことが可能になった。

その他、本論文に関して特筆すべき点としては、受身と使役というヴォイスに関する現象を包括的に扱っており、特に韓国語についてその全体像を示すことに成功している点である。また、使用した用例の量が膨大であることも特徴であり、この点も従来の研究を凌駕していると考ええる。

問題点としては、基本的な概念規定において若干不十分な点がみられること、両言語を対照するにおいて形式のみにこだわり、意味的な面からの考察が不足していること、動作主の格表示に関して二格との結びつきを強調しすぎていることなどが挙げられるが、それらの点も本論文の学術的価値を損なうものではない。

以上の点から、本審査委員会は本論文を博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。